

AMDA ジャーナル ダイジェスト

発行：2010年12月 No.35 定価150円
 発行元：〒700-0013 岡山市北区伊福町3-31-3
 特定非営利活動法人 アムダ：AMDA
 TEL 086-252-7700 FAX 086-252-7717
 E-mail:member@amda.or.jp
 ホームページ：http://www.amda.or.jp
 郵便振替：口座番号 01250-2-40709
 口座名 特定非営利活動法人アムダ

今年1年の感謝をこめて

皆様からの温かいご支援に心より御礼申し上げます。

2011年が良い年となりますようお祈りいたしますとともに、引き続きご協力くださいますようお願い申し上げます。

緊急募金のお願い

ハイチ・コレラ対応緊急医療支援活動
 インドネシア・メラピ火山噴火被災者緊急医療支援活動

《12月1日ハイチ・コレラ対応緊急医療チーム派遣》



岡山駅で新幹線搭乗前にインタビューを受ける菅波代表

10月中旬からコレラの感染が急速に広がったハイチでは、11月20日の時点で1415名の死亡を含む6万2400人のコレラ患者が発生する事態となりました。AMDAでは地震直後の緊急医療活動に続き、義肢支援事業を行ってきました。今回新たにコレラ対応緊急チームを派遣し、患者の治療と予防衛生教育等を実施します。推定25万人の犠牲者をだし今世紀最大の災害と呼ばれる大地震に続きハリケーンによる水害・コレラ禍に

見舞われたハイチの人々への温かいご支援をお願いいたします。

《12月1日派遣者》

菅波茂 医師・AMDAグループ代表、松本明子 看護師、ヴィーラヴァーグ ニッティヤン調整員・AMDA本部職員、大前良輔 義肢装具士・橋本義肢製作株式会社(義肢支援事業に派遣)

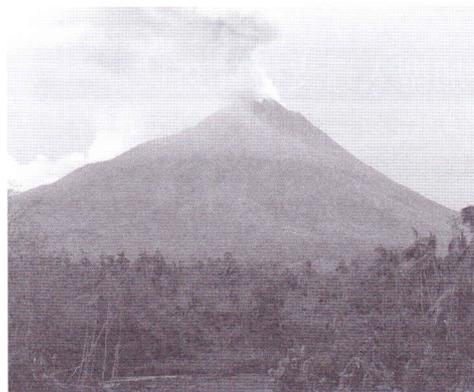
《12月5日派遣予定》朴範子 医師・県立広島病院救命センター

《12月8日派遣予定》山本太郎 医師・長崎大学熱帯医学研究所現地駐在スタッフ

森田加奈子 ハイチ事業調整員・ドミニカ共和国駐在
 八尾直毅 義肢装具士 ハイチ義肢事業プロジェクトマネージャー・ハイチ共和国駐在

《インドネシア・メラピ火山噴火被災者緊急医療支援活動》

11月5日に発生したインドネシアジャワ島中部メラピ火山の大規模な噴火により、呼吸器疾患外来患者17,770人、避難者30万人、死者168人(数字は11月9日付WHO情報)にのぼる被害が発生。当初10月25日の噴火以降、政府は14日間の緊急フェーズを宣言していたが、緊急フェーズが終わる見通しは立っていない。BNPB(インドネシア国家対策局)によると、11月18日時点でも約30万人が火山噴火により避難生活を行っている。AMDAでは、本部とインドネシア支部から医師、看護師等を派遣、18日から被災地マグラン県内で巡回診療活動および食糧等物資配給を実施しています。石岡看護師からは、メラピ山から



噴火の続くメラピ火山と一面灰に覆われた被災地

15Km地点で景色が一変し、大量の火山灰が舞い、植物が枯れており灰色一色。政府はこの15km地点までを警戒地域と指定。この地域は地理的に山深いため貧困余儀



噴火被災地での巡回診療風景

ない様相。ジャワ島ではジャワ語しか話さない高齢者が多く、スラウェシ島マカッサルから来たAMDAインドネシア支部医師らにとっても通訳が必要となる場面が多い。今回の現地協力団体YKP*のトミリヤント氏や地元大学生らの通訳協力によりスムーズに診療している。ーという報告が入っています。

【派遣者】

石岡未和 看護師・AMDA本部職員、米田 哲 小児科医師 タイ・メータクリニック勤務、インドネシアスラウェシ島より麻酔

科医師(男性)2人 両医師ともハサヌディン大学医学部付属病院勤務、ハサヌディン大学医学部女子学生1人、女性通訳1人。
柳井彰人 通訳 ジャカルタ在住交換留学生

【診療患者状況】

18日から23日までで、男性194人、女性321人、計515人の患者を診療。呼吸器感染症、慢性疾患、胃炎、疲労の訴え(不定愁訴含む)などが多く見られた。場所によって、火山灰による眼痛や皮膚の掻痒感の訴え、下痢が多い。

【食糧及び生活物資支援】

マグラン県デュクン村、グジワン村等巡回医療活動を実施した8村落で物資配給を22日実施。配布物資としては、毛布200枚、サルン(腰巻布;伝統衣装であり寒さ対策にも使用できる。被災地域は山間部で夜は冷える。)米800kg、砂糖200kg、塩20kg、ニンニク30kg、赤玉ねぎ60kg(インドネシア料理には赤玉ねぎが欠かせない。これが味の決め手になるという)、黒ケチャップ小袋(14ml)1152個、お茶150箱、油2L 30袋。食糧は8000人への1日分を賄う量に相当する。

【被災者の声】

- ・噴火後は砂と灰と雨が混ざった熱くて重い土砂が空から降って、木が折れ枯れてしまった。
- ・ここでは椰子から作る砂糖を売って生計を立てる人が多い。椰子がだめになり、収入がなくなった。
- ・メラピ山から4kmのところに住んでいるから家に1カ月以上戻れない。早く帰りたい。
- ・何もかも置いてきた。家畜も置いてきた。毎日行って様子を見ている。木々が枯れて何もないのでバナナの葉を家畜の餌にしている。
- ・国際NGOの中でインドネシアの医師が来てくれたのは初めて。そして食料配給も初めてなのでとてもうれしい。遠いところから来てくれてありがとう。ーグジワン村長
- * YKP スラカルタ インドネシア語でYayasan Krida Paramita Surakarta: YKPSurakarta 1989年設立 地域保健開発分野や生活向上のための事業の他幅広い分野で活動。

市民参加型人道支援外交 ーハイチ復興支援スポーツ親善交流ー ハイチの子供たちから

今年8月16~25日の間、日本から中学生17人高校生1人(大阪府から14人、岡山県から2人、広島県から2人)の青少年をハイチ隣国ドミニカ共和国に引率し、ハイチ地震で被災したハイチの子供たちと、ドミニカの子供たちとの3か国サッカー親善交流を実施しました。10月30日には参加した中学生の報告会が岡山で開催されました。参加した日本の子どもたち本人や周辺からは、帰国後の成長著しい様子が伝えられています。地震の後に水害、コレラ禍と困難が続くハイチの子どもたちから、サッカー親善交流の感想が届きましたのでご紹介します。

ビリー・ピエール13歳

プログラムがとてもよく運営されていて、AMDAが最初に約束したことをひとつ残さずやってくれたのが嬉しかったです。将来もプログラムがこの形で続くことを願っています。

ジャン・スコロンブドス14歳

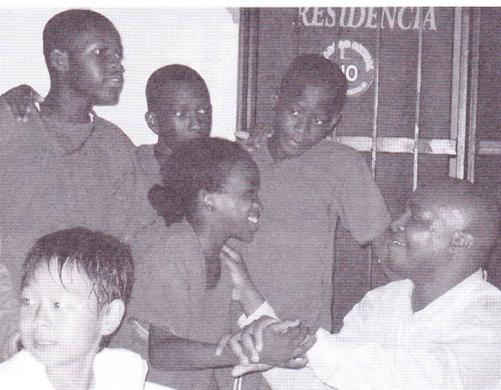
サント・ドミンゴで受けた暖かい歓迎とプログラムの内容にワクワクしました。将来AMDAがハイチの他の地域へもプログラムを広げて、首都だけでなく、レカイ、ゴナイヴ、キャップ・ハイチアンといった地域からも子供たちを連れてきてくれたらいいと思います。

ブランク・ピーベルズ15歳 (交流パーティでスピーチした)

サッカーは大好きなのでこのプログラムは大きな一歩となりました。AMDAからもらったサッカー・シューズを履いて、友達とともに楽しく練習しました。素晴らしい隣国を訪問して、そこで出会った大勢のドミニカと日本の友達の前で2ゴールも上げることができたのは、AMDAのおかげです。ハイチの子供たちの中でこのプログラムがずっと続くと良いと思います。AMDAの人たちみんなにお礼を言いたいです。特にナオキさんとフレデリックさんにはとても良くしていただきました。

ヴェドリン・ジャン・ファブリス11歳

チームへの素敵なサッカーボールの贈りものもありがとうございました。一層努力しようという気持ちになりました。プログラムがずっと続くことを願っています。素晴らしいプログラムを作って下さったAMDAに心からお礼を言います。ハイチのチーム選手はみな、感謝と喜びを伝えています。



交流会での1コマ

「市民参加型人道支援外交」とは

AMDAグループ 代表 菅波 茂

市民間の信頼構築により世界平和に寄与すること。具体的には、紛争や災害の被災者(貧困の犠牲者含む)である市民を、世界の市民が積極的直接的に、日常的に実施可能な方法で支援する。「相互扶助」の視点に加えて、メッセージ性、普遍性そして継続性を前提とする。さらに、世界平和に寄与する人材を育成するとともに、国際社会への発信をすること。



AMDA義肢製作工房で

ハイチ義肢支援事業は、多くの方々の温かいお気持ちを寄せていただき実施しています。首都ポルトープランス区西側のDASH病院の一角にAMDA義肢製作工房を設置し、これまでに28人の義足を製作しました(11月25日現在)。協力者のおひとりの活動をご紹介します。

AMDAハイチ地震被害者に対する 義肢支援プロジェクトへのサポートを経験して —義足中古部品の回収と発送について—

熊本総合医療リハビリテーション学院 義肢装具学科 小峯 敏文

AMDAハイチ地震被害者に対する義肢支援プロジェクトと関わることになったのは、当プロジェクトリーダー八尾氏が筆者の教え子であったことによる。本年4月頃相談を受けた直後から中古部品回収に向けて活動を開始した。中古部品回収の大きな目的は、支援プロジェクトのコストを大きく削減するためである。義肢部品は非常に高価であり、今回発送した分を新規で購入したとすると1000万円をはるかに超えるであろうし、そうなると当プロジェクトの企画自体も困難になったと思う。加えて中古部品回収にも様々なノウハウがあるが、筆者の身近な友人に実践者がいたことから、効率的な計画を立てることができ、とても感謝している。

実際には中古部品の供与が可能と予測される義肢製作事業所のリストアップから始まり、4月初旬から5月中頃までの間、24事業所に対して八尾氏と分担して供与依頼を行った。その結果、11事業所から50～60本分以上と



集まった部品の一部

考えられる部品を筆者の勤務先へ送って頂いた。今回のプロジェクトに対する八尾氏の強い思いが伝わったのだと思う。

さて、単に中古部品回収といっても以下の図のような作業の流れがある。



部品の出自が明らかになるような伝票の作成から発送までの作業の中でたくさんの裏話もあったが、快く手助けをしてくれた本学科の講師や学生ボランティアにとっても感謝している。また一人でできることの限界と、逆にマンパワーの素晴らしさを改めて感じた作業でもあった。本年7月中旬に部品発送後、ハイチ税関事情もあってか八尾氏の元に部品が届くまで2ヵ月以上の月日を要し、現実の義足製作活動も当初の予定より遅れてスタートしたようである。八尾氏のことであるから、限られた期限の中で素晴らしい結果を見せてくれると期待している。

元青年海外協力隊隊員の活躍

ドミニカ共和国駐在 村落開発普及員 小川 千絵

私の活動するドミニカ共和国エリアス・ピニャ県コマンドール市は、ハイチと国境を接するドミニカ西部に位置します。山の中の小さな村を訪れたとき、片足を失った一人の女性に会いました。地震前からこの村に住んでいた彼女はハイチ首都ポルトープランス出身で、ちょうど帰国中に被災し左足を失ったのでした。3月任期終了まで海外青年協力隊員として共にドミニカで活動していた八尾さんが4月からAMDAの義足プロジェクトを始められていました。6月に八尾さんがこの地を再訪されるとき、彼女の元へ八尾さんを案内することになりました。足を失ってから約半年、車椅子と松葉杖に頼る彼女の太ももの筋肉は、前側の筋肉が常に縮み、凝り固まっている状態でした。義足が提供されても、それで歩くには失った側の太もも側面と後ろの筋肉を鍛える必要があるそうです。八尾さんが彼女に教える筋力トレーニングの様子を傍らで見ましたが、相当ハードなものでした。運動が終わって彼女に言った彼の言葉がとても印象的でした。

「私は頑張って義足を作ります。あなたもトレーニングを頑張ってください。いい義足が出来たとしても、あなたの足の筋肉が無けれ

ば一人では歩けるようにはなりませんよ。」私はこれを聞いてはっとしました。これは、彼女だけではなく、開発援助全般に通じることだと思いました。国境

の貧困地域で、外部NGOの援助慣れしている現地の人々。"持つ者が持たざる者に与える"という考えの下、日常的に平気でお金やモノをねだる人々に悩まされ、時にイライラしながら過ごしてきた私の一年間。全てに於いて乏しいこの地域で彼らが自らの足で歩むにはある程度の援助は不可欠。ただし、それだけではいつまでもおんぶにだっこのみです。与えられた援助を有効に使い、一人で歩いていくには、人々の能力、やる気を高めるという、筋力補強が必要だと改めて実感しました。混乱と貧困の隣国で、苦労と共に作った彼の義足がどうか現地の人々の人生を良い方に変えてくれますように、そんな気持ちでこの町を後にする彼を見送りました。



本文で紹介の女性と、八尾義肢装具士

パキスタン洪水緊急医療救援活動

パキスタンでは2010年7月下旬から続いた大雨により8月に入り北部インダス川上流で洪水が発生し、徐々に洪水範囲は南部にまで広がり、全土122県のうち79県が被災し、被災者2000万人、死者1900人余りに上る建国史上最悪といわれる災害となりました。AMDAでは第一次派遣として北部のアフガン難民が多く居住する被災地ノウシェラ県アザクヘルにアフガニスタン支部医療チームを派遣、続いて南部タッタ県に日本チーム、インドネシアチーム、バングラデシュチームを派遣、計4か国から医師11人、看護師6人、調整員3人の計20人が巡回診療に従事し、約5000人の患者を診療しました。日本からの派遣者の渡邊美英看護師の活動日誌一部抜粋と、米田哲医師からの中から報告抜粋をご紹介します。



アフガニスタンチームの巡回診療風景

渡邊美英看護師の活動日誌より抜粋

9月19日 ダルヤカーン バッティ村で診療。患者数76人。堤防の上に点在する難民キャンプ。もちろん「電気・ガス・水道」はないが、人も家畜も共存している状態。堤防の斜面にはヤギやロバ、牛の糞に混ざって人のそれもが点在し乾燥している。乾燥した糞が砂漠の砂と混じり合い、川からの突風で常態的に舞い上がっている。私たちが4時間「全身糞まみれ」状態だった。しかし菅波代表が朝から合流されたため、代表が「女性・子ども」、瀧崎医師が「男性」と分けて、多くの患者を診察することができた。

9月21日 ダルヤカーン バッティ村で再診療。患者数49人。前回19日に菅波代表が診た40℃以上発熱していた1歳の子どものことを皆で心配していたが、今日元気な姿が見えた。日本ならば入院、点滴治療のところ、その子に渡せたのは内服薬だけで、しかも栄養状態も悪かったので、心配だった。子どもの生命力にびっくり。今でも元気でいてほしい。

《感想》生活水の汚れとダニに悩まされた2週間だったが、日本人もインドネシア人もスタッフに恵まれて楽しく活動できた。活動にあたりまわりのすべての人に感謝。わがまを聞いて行かせてくれた職場のスタッフに。一緒に活動した瀧崎医師や寝る間も惜しんで調整員の仕事をしてくれた土佐さんに。そして何より参加を応援し、2週間を一人で過ごしてくれた夫に心から感謝。全ての人が、愛情や癒しをもらったら、次は自分のまわりにその愛情や癒しをあたえていけたら…と思います。機会があればまた参加させてください。

(渡邊看護師は2度目のAMDA緊急救援活動への参加。)



ケガの手当をする渡邊看護師



巡回診療中の米田医師

米田哲医師の活動報告より抜粋

当初は、多くの被災者が長期にわたる避難生活を過ごしていることから、下痢疾患や感染症の発生を懸念していたが、現地では、被災者がかなり広い地域にわたって避難していたことから、被災者が密集することがなく、また、現地NGOが速やかに水の確保やトイレの整備、そして水に混ぜる消毒薬を配布していたため、幸いなことに感染症の爆発的な発生はみられなかった。マラリアが流行しているとの情報もあったが、患者数は少数であった。結果として、我々が診察した患者の疾患は、日本や諸外国で一般的にみる疾患分布とほとんど変わらないものであったが、昨年のインドネシア・スマトラ島沖地震の際と比較すると、小児の栄養障害、それも重度の栄養障害が目についた。また、成人の栄養障害の患者の多くは女性であった。もともと貧しい住民が多く住む地域であり、洪水被害の前からの栄養障害なのか、洪水の後に、避難所で食糧を手に入れることができずに起きてしまったのかは分からないが、いずれにしても、貧しい地域で、災害が起きると、一番被害を受けるのは社会的弱者である。現地NGOに事情を説明したところ、非常に関心を持っていただけたので、我々が活動を終了した後に現地で活動するNGOに情報を引き継いでもらうと共に、長期的な治療や食料支援をお願いすることができた。地域によって栄養障害の患者や皮膚疾患の患者の割合に差があるということは、地域によって食糧が不十分であったり、皮膚を清潔にできていない可能性があり、これもNGOに情報を引き継いで、長期的な視野で支援をお願いした。(米田医師は昨年に続く2回目のAMDA緊急救援活動への参加。この後11月のインドネシア・メラピ火山噴火緊急医療支援にも参加) 【派遣者】日本から医師/菅波茂、瀧崎祐一、細村幹夫、米田哲、看護師/渡邊美英、松本圭古、調整員/土佐光章、ヴィーラヴァーグ・ニッティヤン。アフガニスタンより医師4人、看護師2人、インドネシアから医師2人、看護師1人、バングラデシュから医師、看護師、調整員各1人。

*AMDA会員募集

	年会費	学生会員	7,500円
医師会員	15,000円	法人会員	30,000円
一般会員	10,000円	賛助会員	2,000円

※医師・一般・学生・法人会員には、活動報告誌『AMDAジャーナル』を年4回、『AMDAダイジェスト』を年2回、賛助会員には『AMDAダイジェスト』を年2回送付しています。

書き損じはがき、未使用切手を集めています

書き損じはがきは切手に交換し、通信費として活用しています。AMDA事務局までお寄せください。

お問い合わせ先 電話:086-252-7700

Fax:086-252-7717 e-メール:member@amda.or.jp

AMDA本部は今年6月より新事務所に移転しています。

〒700-0013 岡山市北区伊福町3-31-1 電話:086-252-7700 Fax:086-252-7717